

神奈川大学民俗学研究会のこれまでの歩み

神奈川大学民俗学研究会

「神奈川大学民俗学研究会」（以下、神大民俗）は、令和2（2020）年に新設された国際日本学部歴史民俗学科の学生によって、令和3（2021）年に結成された研究会です。

神大民俗を設立した当時は、まさにコロナ禍の深刻化が加速していた時期でした。歴史民俗学科においては、同級生や先生方との交流の場を十分に得ることが叶わず、入校規則や外出自粛により歴史学・民俗学ともに欠かすことのできないフィールドワークを行えない状況も続き、学生生活・勉学ともに様々な影響を受けてきました。しかし、「（コロナだから）を理由に何事も諦めてしまうのはもったいない」という考えから、新設の学部学科であるという背景も相まって、学生主体の研究会の設立へと至りました。

神大民俗は実に様々な活動に取り組んでおり、その詳細は後半で紹介させていただきますが、研究会設立当初から意識しているのは、

- ① 講義で学んだ知識のアウトプットを行うことで、そこから共同研究や企画を練る
- ② 学生や先生方との交流の機会を生み出すことで、学年を越えた関係性の構築を目指す
- ③ 年に一度、学生の調査報告やコラム等を掲載する会誌『神大民俗』を刊行することで、学生同士で学びを高め合い、編集・推敲作業に参加することで様々な経験を得られる場とする
- ④ 学科の学びの〈その先〉を見据える

という4点です。この4点を研究会の基盤として築き続け、活動4年目を迎える現在では、歴史民俗学科の1年生から4年生をはじめ、同学部日本文化学科の学生の参加もみられるようになり、活動によっては分野横断的な参加者の集まりが増えました。また、今年度は研究会員3名が神奈川大学院歴史民俗資料学研究所博士前期課程に所属していることから、今後はさらに参加者の多様な所属やそれに伴う活動の幅の広がりがみられると予測しています。

先に記したように、神大民俗の活動の幅は年々広がりをみせています。ここでは一つ一つの活動の詳細な説明は割愛しますが、全ての活動の記録は会誌『神大民俗』（創刊号から第3号をPDFで公開中）やweb記事「note」にまとめていますので、そちらを参照していただければと思います。簡単にこれまでの活動概要を示しますと、初年は江戸時代に隆盛した「つくりもの」文化によって庶民の手から生み出された疫病に対峙する神様「麦殿大明神」に関する共同研究を行い、活動のなかでは実際に竹細工を用いてコロナ禍版の麦殿大明神をみなとみらいキャンパスに迎え入れました。続いて2年目・3年目は、横浜キャンパスの最寄りである白楽駅周辺に広がる「六角橋商店街」にてフィールドワークを実施し、六角橋商店街の歴史をはじめ、現在お店を構えている店主やお客さんへの聞き書き調査からライフヒストリーの報告を行いました。また、3年目は「民具（昔の人々、または私たちの生

活を支えてきた、支えているモノ）」と「デジタルファブリケーション」の連関を示す企画に挑戦し、経営学部の先生やファブラボみなとみらいのスタッフの方々との共同によって、民具を描いたアクリルキーホルダーを景品とした「民具ガチャ」の展示を夏のオープンキャンパスにて実施しました。

そのなかでも、六角橋商店街の調査、通称「六角橋民俗」は様々な成果を得られた共同研究であったと捉えています。研究会設立時の指針の2つ目を体現するために、夏休み期間を利用したフィールドワークの際には、異なる学年の学生同士で2人一組のペアをつくり聞き書きに出ました。最初はペア内でも緊張した雰囲気を感じられましたが、横浜キャンパスの図書館でのまとめ作業の際には、どのペアからも和やかな雰囲気が見て取れました。コロナ禍ということもあり、これまで学年の垣根を越えた交流があまり見られなかった本学科ですが、こうした学生有志の調査の場において学生が協力し合い、時には他愛もない話で盛り上がることもできたことは、良い成果であったと思います。

そして、普段何気なく通り過ぎてしまう六角橋商店街の歴史、ならびに店主のライフヒストリーやお客さんとの交流の在り方を聞き書き調査によって知ることができた点は、実際に町に出て調査を行う共同研究の醍醐味であったと考えています。なお、調査を終えての考察では参加者によって多様な意見が見受けられましたが、その全体は会誌に掲載していることから、こ

ここでは一部抜粋しながら参加者の様子をお伝えできればと思います。

当時歴史民俗学科2年生であった学生は、「六角橋商店街に昔からお店を構える店主さん」にお話を聞き、その調査を通じて「昔からあるお店に共通する」とは、「六角橋商店街の中で愛されている」ということ「であったと述べています。調査時もお客さんがお店を訪れる場面に何度か遭遇し、「店主さんとお客さんの距離が近く、他愛もない会話を交えながら接していたことが印象的であった」といい、「お店の人とお客さんが信頼しあっていることも知ることができた」ようです。こうした気づきから、この学生は「近年、六角橋商店街では物を売る小売店が減り、飲食店ではお店の入れ替えが激しい状態であり、つい数ヶ月前に開店したお店が潰れてしまうことも多くある。その中でも昔からあるお店は今でも地域住民と強い関係を結びながら営業を続けている。調査したお店は、お客さんに愛されながら現在でも営業を続け、お客さんとの「信頼関係」が深いお店である。そして、六角橋商店街では今でもお客さんとの深い「信頼関係」をみせるお店が多く存在しているのである。そのようなお店は簡単になくなることはなく、地域住民に愛され続けるだろう。」という考察を導き、「店主さんの温かさ」は「時代は変化しても人との関係性、結びつきは変わらない」ということを私達に示してくれている」と六角橋商店街ならではの地域性を考察しています。

このように、神大民俗における様々な活動は、単に学部学科の講義の延長ではなく、時には神大民俗での活動が講義の糧になる可能性を秘めています。また、昨年度の「民具ガチャ」企画のように、学部学科の講義だけでは体験できないような調査も行うことができ

るため、今後も様々な可能性を有している研究会であるはず。今後もnoteや会誌を通じて我々の活動を発信し続けていきますので、ぜひご声援いただけますと幸いです。

神奈川大学民俗学研究会note

https://note.com/jindai_folklore/

